弥生 vol.13

陽

平成 30 年 1 月発行　弥生神社

02　お宮の風景「七五三詣」「注連縄奉製の集い」

03　ワークショップ「重陽の節句～菊花アレンジと茱萸嚢づくり～」
「ぽち袋を作る小さな会」

04　ワークショップ「御朱印帳づくり」「冬、植物を飾ろうの会」

05　神宮大麻の歴史

06　植物紀行 (三)「福寿草」　荒谷 渚

07　「蚕 の神様を訪ねて（一）筑波　蚕影神社」　谷口悌三

09『古事記』上つ巻「天の石屋戸」より

10　古今のうた「陽」

11　「昼の船、夜の船」　和田浩一郎

13　本を読む。「陽」　小河洋友

14　「太陽のあたる場所」　浜野まや

15　「おひさまのひかり」　ふかのあき

16「見えないちから。」　布留川真紀

17　「穂高の太陽神」　森　岳人

19　授与品のご案内 / 編集後記

陽

お宮の風景

七五三詣

平成二十九年秋、七五三詣のお子様とご家族で賑わいました。

十二月三日 注連縄（しめなわ）奉製の集い

新年の御社殿を飾る注連縄と茅の輪を作りました。作業終了後には、社務所にておでんの会を開きました。

重陽の節句
～菊花アレンジと茱萸嚢づくり～

昨年も開催しました茱萸嚢作りのワークショップ、今年は旧暦の重陽の節句に合わせて、十月二十一、二十二日に行いました。夏、端午の節句の行事では、蓬や菖蒲など様々な薬草を使った薬玉を作りました。昔は、秋の重陽の節句に、厄除けや健康を願って茱萸嚢を作り薬玉と取り替え、御簾などに掛けていたといいます。

ご須臾の実を詰めた茱萸嚢、昔は緋色の袋だったようですが、ワークショップでは、様々な模様の絹帯を使って皆さんそれぞれ、色とりどり袋が縫いあがりました。昔の風習が現代風に色鮮やかに再現されていくようでした。

「菊の節句」にちなんで菊花のアレンジを、伝統的な草花包み、木花包みに挑戦しながら楽しみました。菊花やご須臾の実に触れ、香りをかぎながら、五感で重陽の節句を味わいました。次の端午の節句には、ふたたび茱萸嚢と掛けかえる薬玉作りを行う予定です。

↑材料は和服の絹帯を解いたもの。厚手なので少し縫いにくいのですが、できあがりは見栄えよく、その出来栄えに満足します。　↑男性も女性もお子様も、黙々と手を動かしてひと針ひと針縫いあげます。

ぽち袋を作る小さな会

十月十四、十五日、「ぽち袋と封筒を作る小さな会」を開きました。

シンプルな型紙と紙だけを使い、作り方もとても簡単なのですが、お店に並ぶものとはひと味違う、工夫を凝らしたぽち袋や封筒を作りました。様々な和紙の中からじっくりと選び、紋切りを貼ったり、千代紙や薄紙をちぎって貼ったり、水引飾りをつけたり。色とりどりの袋ができあがりました。和紙の種類によって手触りや表情の違いがあり、雰囲気の違う袋になります。そんな和紙の奥深さに感心する声もありました。

作る私たちもそれを受け取る人たちもふんわりとあたたかな気持ちになるような小さな袋。ひとつひとつ丁寧に作りました。ゆっくり心静かに手作業をする時間。ご参加の方どうしの交流も生まれて、お茶会のような雰囲気になりました。そんな和やかで小さな会、これからも開催していきたいです。

はじめは黙々と集中して袋を作りました。そのうち教え合ったりおしゃべりしながらのモノづくり。

御朱印帳（ごしゅいん）づくり

十一月二十六日、十二月二日に御朱印帳作りのワークショップを開きました。遠方からはるばるご参加いただいた方、初めて弥生神社に来られた方、これを機に御朱印集めを始めようという方、様々な方が集いました。

まずは二十四枚の奉書紙を折り、糊で貼り合わせていき、蛇腹（じゃばら）状のページを作ります。そしてお好みで表紙の布地を選び、厚紙の台紙に貼っていきます。簡単なようで綺麗に仕上げるには「思ったより難しい」という声もありました。そんななか小学生たちも頑張って作り上げました。

思い入れのある布地を持参する方もいらっしゃり、表紙と裏表紙の柄が異なる華やかなもの、黒や濃紺を基調としたシンプルでシックなもの、幾何学柄を生かしたモダンなもの、ポップで可愛い綿のものなど様々な御朱印帳が完成しました。他の柄でまた作りたいというご要望にもお応えして、新年も開催したいと思います。

↖間違えずに紙を貼れているか、蛇腹を開くときには少しドキドキします。
←表紙の布には刷毛でボンドを塗ります。

冬、植物を飾ろうの会

十二月九日「冬、植物を飾ろうの会」を開きました。ご自宅のユーカリやほおずき、柊などの草花をおすそ分けしていただいたり藤の蔓を採ってきてくださったりとご協力いただいた方々のおかげで、様々な種類の草花が所狭しと会場に並び、植物の芳香で満たされました。四歳のお子様からご高齢の方まで、様々な植物を使ってリースや壁掛けなどを作りました。

植物に触れるうちにアイデアがどんどん浮かんで木の実を板に貼ったり、枝を自由な形に曲げたりと遊び心に溢れた作品が生まれてきました。「いつまでも遊べる」「時間を忘れる」という言葉に植物の魅力や面白さをあらためて感じました。

←香りの良いユーカリの葉はご参加の方より差し入れていただきました。

神宮大麻の歴史

神宮大麻は、伊勢の神宮から年ごとに全国に頒布されるお神札です。

御師と「御祓い大麻」

いつ頃から全国各地でおまつりされていたのか定かではありませんが、平安時代末には、神宮に仕える御師たちが各地で「御祓」を配布していたことがわかっています。この「御祓」、いわゆる「御祓い大麻」が「神宮大麻」の始まりとされています。

御師は神宮の崇敬を一般に広めるとともに、「檀那」「檀家」と呼ばれた人々の求めに応じてお祓いと祈祷を行い、祈祷をしたしるしとして「御祓」を配っていました。人々はそれを「御祓さん」と呼び大切におまつりし、遠方から「お伊勢さま」を拝み、信仰を深めていました。

こうした御師の活躍により、江戸時代中期には全国の多くの世帯に大麻が頒布されていました。また、各地に「伊勢講」と呼ばれる崇敬組織もつくられ、庶民の間でお伊勢まいりが盛んになります。御師は、参宮者の宿泊の手配をしたり、自邸で神楽をするなどのもてなしもしていました。

「一万度祓」・「五千度祓」

この「御祓い大麻」は、お祓いをした「大麻（幣帛）」を箱型の箱祓や剣先の形をした剣御祓に納めたものです。また、包み紙にはお祓いを受けた回数と、御師の名前が記されており、「数祓」といって幾度もお祓いをすると清めの力が増すと言われ、「一万度祓」、「五千度祓」といった御祓大麻が頒布されるようになりました。神宮大麻を祓いのための祓具とする考えがあるのもこうした大麻の歴史によるものです。

「御祓い大麻」から「神宮大麻」へ

やがて御師により奉製され配られていた「御祓」は、制度改革により伊勢の神宮が直接、大麻を奉製、頒布するようになりました。これに伴い、大麻の体裁も「天照皇大神宮」の御神号に御璽が押印された現在の形に、名称も「御祓い大麻」から「神宮大麻」へと改称されます。その後、昭和二十一年に神社本庁が設立されると、本庁が神宮大麻頒布の委託を受けて、神社本庁から全国の神社を通じて各御家庭に頒布されるようになったのです。

【参考文献】

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂）平成十一年

神社本庁編『神宮大麻・暦についてのQ&A』平成十年

「御祓」

神宮ホームページより

http://www.isejingu.or.jp/index.html

植物紀行（三）

福寿草

荒谷　渚

桜や菜の花が咲くと春真っ盛りといった華やかな景色になりますが、落ち葉や雪の中から慎ましやかに顔を覗かせる福寿草は、冬の眠りからの目覚め、春の足音を感じさせます。野生では山林の落葉樹の下などに生えていることが多く、二月から四月に開花する山野草です。なので、お正月の頃に売られている福寿草は温室栽培で一足早く開花させたものになります。

旧暦では、現在の二月上旬が一月上旬のお正月の頃にあたるため、昔の人は福寿草をその年の一番に咲く花ということで「福告げ草」と呼んでいました。花が咲いている期間が長いということもあり、長寿の「寿」と合わせて福寿草と呼ばれるようになったそうです。また、別名を「元日草（がんじつそう）」「朔日草（ついたちそう）」ともいい、南天の赤い実と一緒にお正月飾りに使われたりします。南天は「難（ナン）を転（テン）ずる」と言われるため、南天と福寿草を一緒に添えることで「難を転じて福となす」という縁起物として扱われます。

福寿草の花言葉は、その名の通り「永久の幸福」「幸せを招く」「祝福」などです。しかし、これらのおめでたい意味とは真逆の「悲しい思い出」という花言葉もあります。福寿草は“Adonis”（アドニス）という学名を持ちますが、これはギリシャ神話に登場する美少年アドニスの名に由来します。ある日森に狩に出かけたアドニスは、不運にも猪に襲われ命を落としてしまいます。その時に流れた血から咲いた赤い花が福寿草だというお話です。欧州の福寿草は赤いそうですが、日本では鮮やかな黄色い花が一般的なので、幸福の意味で捉えられています。

福寿草は縁起のいい花ですが、一つ気を付けなければならないのが、実は毒草だということです。食べなければ問題ありませんが、強心作用のある成分が含まれているので、摂取すると死に至ることもあります。芽が出たばかりの時はフキノトウと似ているため、誤って摘んで食べてしまわないように気を付けましょう。

（あらたに・なぎさ）

カイコ

蚕の神様を訪ねて

映像作家／民俗研究者
谷口悌三

●蚕影神社／つくば市神郡二〇五六
主祭神：和久産巣日神、埴山姫命
木花開耶媛命

弥生神社境内に鎮座する蚕影神社．生計を支える大事な蚕の天敵はネズミなので、今も社務猫が見回り中！

（一）筑波 蚕影神社

弥生神社の境内に鎮座する蚕影（こかげ）神社。読んで字のごとく蚕の神様が祀られています。現在では子授け、安産の神様として地域の人々から信仰されていますが、かつて養蚕が盛んだった頃には農家の人々から信仰を集めていました。

この蚕影神社は、確かな記録はありませんが、筑波山麓に鎮座する蚕影神社（本社）から分祀されたものと考えられます。蚕影神社は関東を中心に数多く分布しており、蚕影信仰の広がりがうかがえます。またその多くは筑波から伝わったものと言われています。

「蚕影信仰」については後の回にあらためてご紹介します。今回は蚕影信仰のふるさと、筑波山からのレポート（平成二十九年三月と十月）です。

茨城県つくば市神郡にて（平成 29 年 3 月）

旧参道「つくば道」から筑波山の全景がきれいに見える場所、ここに蚕影神社本社は鎮座しています。

江戸時代までは筑波山で修行する修験僧も多くいたと思われる地域ですが、明治以降、養蚕繁盛を祈願する人々が大勢参拝につめかけ、昭和初期の宮司さんの記録を読むと「休むヒマもない！」と悲鳴を上げるほど賑わったと記されています。また、昭和三十～四十年代まで観光バスに乗った一行がお参りに来ていた、と地域の方も記憶されていました。

筑波　蚕影神社の御社殿

拝殿の内外には、各地の養蚕組合などから奉納された額がみられ、熱心に信仰されていたことがうかがえます。

平成 29 年　蚕糸祭

平成二十九年、繭の豊作を祈る蚕糸祭（三月二十八日）と秋の御例祭（十月二十三日）に参列させていただきました。春の蚕糸祭は、繭の豊作を祈るお祭りです。神事では、神職による祝詞の奏上に続いて、地域の方々や蚕影講の皆さんの他、参列者全員による玉串奉奠が行なわれます。

秋の御例祭には、地域の小学校の児童が育てた繭が納められていました。しかしこの小学校は廃校となるため、これが最後の奉納だったようです。その繭の輝きをみると、地域の歴史や文化を次世代に伝えていく場所として神社のあり方を考えさせられます。

（文／写真　たにぐち・ていぞう）

＊蚕影神社（本社）の蚕糸祭と御例祭は、それぞれ三月二十八日と十月二十三日。ともに午前十一時に斎行されます。

御例祭で奉納された繭

参道にあるお店で売られている名物「蚕影羊羹」！（側面には「養蚕大当り」の文字）今では蚕糸祭や御例祭などのときしか手に入らない珍しい縁起物として、お土産にお奨めです。

かく言す間に、天児屋命、布刀玉命、その鏡を指し出して、天照大御神に示せ奉る時、天照大御神、いよよ奇しと思ほして、稍戸より出でて臨みます時に、その隠り立てりし天手力男神、その御手を取りて引き出し即ち、布刀玉命、尻くめ縄をその御後方に控き度して白ししく、「これより内にな還り入りそ。」とまをしき。故、天照大御神出でましし時、高天の原も葦原中国も自ら照り明りき。

『古事記』上つ巻「天の石屋戸」より

このように申し上げている間に、天の児屋の命と布刀玉の命が鏡を差し出して、天照大御神にお見せ申し上げると、天照大御神はいよいよ不思議にお思いになって、少しずつ戸から出て、のぞき見られる時に、そこに隠れ立っていた天手力男神が、その御手を取って外へ引き出し申し上げるやいなや、布刀玉の命が尻久米縄（注連縄）をもって、その御後に引き渡して、申しあげたことには、「これより内にお戻りにはなれますまい」。こうして、天照大御神がお出でになられると、高天原も葦原の中つ国も当然のように照らされ明るくなった。

＊天照大神は、弟の神である須佐之男命の悪行に嘆いて、高天原にある岩窟「天の岩屋戸」にお隠れになった。それにより、世は昼がなく夜ばかりが続いた。そこで八百万の神々は天安河原にお集まりになりご相談され、天岩戸の前で様々な事が試された。まずは、太陽の神様を呼ぶ力があるとされている長鳴鳥を鳴かせてみた。さらには舞をされたり、騒ぎ立てたり…。そして、鏡を見られた天照大御神は、別な太陽（日神）がいると思われて、一層不信を抱かれた。太陽の光を受けて輝く鏡は、太陽の象徴と考えられてきたのである。

【参考】

『古事記』西宮一民校注（新潮社）／『古事記』倉野憲司校注（岩波文庫）

～古今のうた～　陽

なごの海の霞のまよりながむれば
　入る日を洗ふ沖つ白波

晩霞といふことをよめる　後徳大寺左大臣
『新古今和歌集』（春歌上　0035）

夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖（うみ）の静けさ
島木赤彦『切日』「諏訪湖」（大正四）

木洩れ日はみだれしほどの斑（ふ）となりて死したるさまの甲蟲（かふちゅう）に射す
太田一郎『墳』（昭和四十一）

没つ陽の大きたゆたひにめくるめくにんげんといふこの身もてあます
成瀬　有『海やまの祀り』（平成三）

見えぬこと足らざることをよしとして初日は心の中に昇らす
三枝昂之『農鳥』（平成十四）

川の面に初日の影を揺らしつつ海へ永久（とは）へと流れゆく水
伊藤正幸『いわき民報社』（平成二十）

日は月をいだく金色（こんじき）待ちわびる花惑星に影流れゆく

金環は愛しきかたちひとときを連れ去る黒き月はすがしき
高崎淳子『難波津』「金環日蝕」（平成二十八）

＊「なごの海の～」なご（摂津の国）の海の霞の間から眺めると、今しも波間に入ろうとする夕日を沖の白波が洗っているように見えるよ。

太陽神の旅が描かれた王墓の壁画

昼の船、夜の船

和田浩一郎（エジプト学研究者）

古代エジプト文明は、ナイル川から生まれた文明である。この川は毎年の増水によって流域の農業を支えていたが、人やものが移動する大動脈としての貢献も小さくなかった。船による水上交通は、陸上の道路網を整備するよりはるかに容易であり、南北千キロメートル以上におよぶ王国の維持に欠かせないものだった。

船旅が古代エジプト人の生活にいかに密接なものだったかは、日輪で象徴される太陽神が、船で世界を旅すると考えられていたことにも表れている。夜明けに東の地平線に姿を現わす太陽神は、「昼の船」と呼ばれる船で天空を渡った。太陽神は天空を移動するうちに一生を過ごすと考えられた。つまり夜明けに幼い子供として東の地平線に現れ、空を渡るうちに壮年となり、日没には足元も覚束ない老人として生涯を終えたのである。古代エジプトの太陽神といえば、頭上に日輪を頂いたハヤブサ頭のラー神がよく知られているが、この神は正午ころの最も力強い太陽神であり、幼い太陽神はフンコロガシ姿のケプリ、老いた太陽神は人の王の姿をしたアトゥムと、それぞれ別の名前と外見を持っていた。

日没に死を迎えた太陽神は、今度は「夜の船」に乗り換えて、西から東へ地下世界を旅する。死者となった太陽神は、地下世界の一番深い場所で原初の海（世界がはじまる前から存在する水）に接することで完全

太陽の船
（ツタンカーメン王墓出土）

渡し舟は今も生活の足である

な力を取り戻し、翌日、東の地平線に姿を現すと考えられた。夜明けはフンコロガシが日輪を持ち上げる描写によって、しばしば表現された。

太陽神が旅する地下世界は、扉によって十二の世界（時間）に区切られており、夜の船はこの扉を押し開いて、ひとつの世界から次の世界へと移動していった。太陽神がやってくると、その世界は地上と同様、陽光に満ちた。「門の書」と呼ばれる宗教文書の挿絵には、太陽神の到来を喜び、棺から起き上がって踊る死者たちの姿が描かれている。死者たちは太陽が輝いている間に一生涯を経験するとされ、太陽神が扉から退去する時には、その世界にいるすべての者たちから嘆きの声が上がった。光が去ると死者は再び棺に戻り、次の到来を待たなければならなかったからである。

世界に光と音、季節と秩序をもたらした太陽神は、文字通り古代エジプト社会の創造者だった。この神が日々みせる生と死の循環は、ナイル川の増水と同様に、古代エジプト人の死生観に大きな影響を与えたのである。

（わだ・こういちろう）

【参考文献】
和田浩一郎『古代エジプトの埋葬習慣』（2014）
株式会社 ポプラ社

本を読む。

小河洋友
（おがわ・ひろとも／図書館司書）

今回は「陽」をキーワードに五冊を選んでみました。われわれの世界を秩序づける「陽」。人が「陽」をどのようにイメージしてきたのか？そのことがいかなる「世界」を形成してきたのか？大変興味深い本ばかりです。

太陽大図鑑

クリストファー・クーパー／著
柴田一成／監修
緑書房（2015.10）

天の川銀河だけで三千億ある恒星のひとつに過ぎないが、人類にとってかけがえのない星である太陽。本書では太陽の誕生と構造、人類の歴史に及ぼした影響、そしてその活動が地球の気候や人々の健康に及ぼす影響を明らかにしています。NASAが捉えた美しい写真満載。

世界の太陽と月と星の民話

日本民話の会
外国民話研究会／編訳
三弥井書店（2013.10）

地球上どこからでも見ることのできる太陽や月。どんな思いを抱いてこれらを仰ぎ見るかは民族の違いや住む土地の気候条件などによってさまざまです。本書では太陽や月、星にまつわる民話を世界中から収集。分布状況やバリエーションについても言及しています。

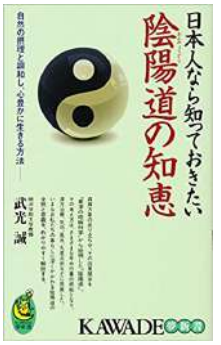
系外惑星と太陽系

井田 茂／著
岩波書店（2017.2）

「天空の科学」が明らかにする別世界の旅へ！「系外惑星」とは太陽系以外の惑星の呼称であるとのこと。天文学の革命的な進展により、いまや数千個が発見されているそうです。その姿は、太陽系とは何か、地球とは何かという根本的な問いへと我々を誘います。

日本人なら知っておきたい陰陽道の知恵

武光 誠／著
河出書房新社（2010.10）



森羅万象の成り立ちや、その因果関係を“東洋の経験科学”から説明した「陰陽道」。すべての物事がつくられている「気」を「陰」と「陽」に分類する「陰陽説」から成立したとのことです。いまなお私たちのくらしに深く関わる陰陽道の全貌と意義を、わかりやすく解説しています。

きょうおひさまがでなかったら

塚本 やすし／著
フレーベル館（2017.3）

太陽が人間にとって、身近で大事な存在であることを伝える絵本です。ある朝目が覚めると、七時だというのに外は真っ暗。主人公のぼくは宇宙船に乗ってお父さんと一緒に、おひさま探しの旅に出ることになりました。太陽について考えることで科学する心を養う一冊。

太陽のあたる場所

浜野 まや

新年明けましておめでとうございます。戌年の二〇一八年、平成三十年ですね。そんな新年の始まりは初日の出とともに、という方も多いかと思います。「その年の最初の陽光」と、この文字面を見るだけでも、ふうわりとあたたかく、ありがたみを感じます。

私が子どもの頃に習っていたエレクトーンの楽譜に、A Place in the Sun「太陽の当たる場所」と邦題が付いた曲がありました。四十年経った今でも暗譜でき、日向を見るたび譜面と挿絵が思い出されるほどお気に入りでしたが、まだ十代だったスティービー・ワンダーの一九六六年の作品であることは、東日本大震災の二年後、某自動車会社CMで流れてきたのがきっかけで知りました。北野武と木村拓哉が、復興に邁進する東北路をロードムービーよろしくドライブするストーリィにかぶせて、若きスティービーが耳覚えのある音に乗せて「Movin' on（前へ進もう）」と歌っていたのです。

私は陽光を遮った時にできる影にふと目を留めてしまうたちで、例えば初めて訪れた沖縄本島での、ぎらつく日射が路面に刻み込むばかりにくっきりと濃い影を今も覚えているのですが、この曲も、陽が燦々と入る場所という晴れがましさというより、軒下の濃い影から日向に憧憬をもって眺めているような、切なくも希望を感じる旋律が使われています。歌詞もそのとおりで、たとえ孤独でも、今その手にない自由のために、陽の当たる場所を目指そう、というものです。

暮らしていると、とかく暖かく明るいことばかりを求めたがるものですが、実際そんな甘いものではないことくらいは、ある程度年月を経れば誰もが知ること。温もりも光も、陰を体験したからこその有り難みです。

♪みんなの希望がそこにある
陽の当たる場所へ♪

温もりと光しか分からなかった子ども時代に覚えたメロディが、オトナになってやっと知った歌詞を伴うと、今から三六五日先を見はるかすための白いスタートラインのように響きます。

この一年も、健やかで、住きものになりますように。

（文／写真　はまの・まや）

こちらが世界版

日本リリース版。
ちょっとしたレア版だとか

＊画像は、レコードのジャケットです

おひさまのひかり

私全部をやわらかく包んで
じわじわ そーっと ほぐしてくれる

体から 顔から 力が抜けていって
ほわりほわり

ただその心地よさを感じる
それは 今
その瞬間を生きているということ

いろんな情報や
いろんなつながり

頭ばかり働かせていると
先のことばかり考えて 不安になったり
過ぎたことばかり考えて イライラしたり

あれれ？
私はどこにいるんだろう
何をしたいんだろう

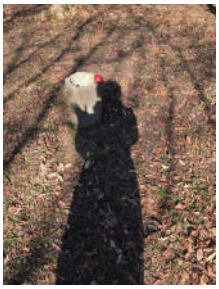
ゆっくり ゆっくり
今に戻ってくる

おひさまのあたたかさ
カルダモンやナツメグの香り
松ヤニのベトベト
お湯がぽこぽこと沸く音

当たり前のことを感じる 幸せ

誰かと手をつないでみたら
そこには おひさまのような
あたたかさがあるかも

文／写真／ページデザイン
アロマセラピスト
ふかの　あきこ



見えないちから。

布留川真紀

静岡県天宮神社にて

子供の頃は大好きだった冬。現在は大人になったせいか、寒いのが少し苦手になってしまいました。地球への太陽光の当たり具合が変わるだけで、こんなに気温が変わるとは不思議です。

日ざしの良い日は、布団を干して太陽の温かさの恩恵にあずかります。夜まで布団がふかふかな、何にも代えがたいあの幸福感。ほのかにする、お日様の匂いとは、実際は何でしょうね?あらゆる動物も日向ぼっこをしますので、太陽は欠かせない存在です。

太陽はその一方で、異常気象などの災害を引き起こしてしまうことがあります。温かさを超え、暑さ、猛暑と変化し牙を剥きます。また、太陽の熱によって海面や地表から蒸発した水蒸気が雨雲を作り、低気圧や台風になります。思わぬ太陽の影響ですよね。日光の紫外線も度を過ぎれば、人間の肌に悪影響をもたらします。

温かさもさることながら、太陽からの光の美しさといえば、朝焼け、夕焼け。そして、虹には誰もが魅了されます。太陽の光と雨粒の魅せる光の橋は、儚くも幻想的。いつ見られるかわからないので、見えた時はラッキーですよね。

似たような現象にアークがあります。アークは、大気中の水蒸気が日光に当たって虹のような輪ができる現象です。虹より小さく、円弧の向きも異なるアークを見た時は、その神秘的な姿に大興奮しました。

太陽の自然現象で思い浮かべるのは日食。平成二十四（二〇一二）年五月二十日に日本の太平洋側で金環食を見ることができ、話題となったのを覚えている方も多いでしょう。実際の日食は薄暗くなる程度でしたが、あの輝く太陽が欠けて、金の輪になって再び元の姿に戻る現象は大変ワクワクもしました。

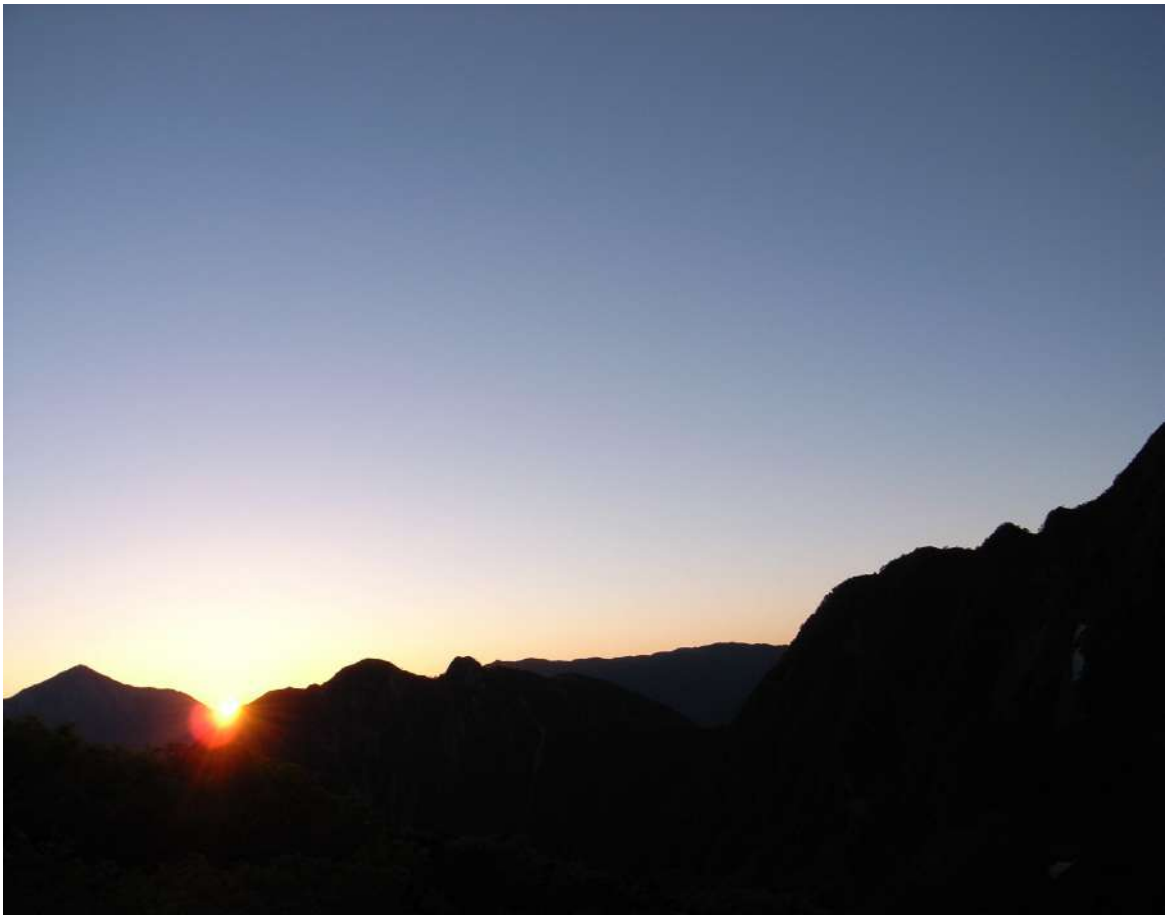
太陽神を崇める国では、日食は不吉の前兆とされていたようです。ヒンドゥー神話でこんな話があるそうです。不老不死の薬を盗んだ魔神が、太陽神と月の神の告げ口で偉い神様に首を切られてしまいました。魔神は頭と体の二つに分離し、告げ口をした太陽と月を追いかけては食べようとしますが、頭だけ・胴体だけなのですぐ太陽と月が出てきてしまいます。日食や月食は魔神の仕業だと考えた、古代インドの人々の創造力の豊かさに驚きます。

天体ショーに関連してもう一つ。北国の夜に輝くオーロラ。これも太陽の影響だそうです。太陽から吹く太陽風のプラズマが、北極や南極の空で酸素や窒素に反応し光を放ちます。冬のヨーロッパへ向かった折に、日没後、飛行機の窓にかじりついて、オーロラを見ていました。オーロラは、ローマ神話の暁の女神の名からきています。夜に見えるオーロラが、太陽と繋がりがあることを考えていたローマ人も凄いと思いませんか?

ほとんどの国で、古代の人々も偶然起きる自然現象に神の業を見たことでしょう。太陽は見えないちからを様々なかたちにして、生き物すべてに関わっているのですね。改めて太陽の威力はすごいですね。

（文／写真　ふるかわ・まき）

平成23（2011）年元日　九十九里漁港にて



穂高の太陽神

森　岳人　（書籍編集者）

コッヘルの触れ合う音で目が覚めた。もう出発する準備をしているパーティーがいるのだろう。外を覗くとまだ真っ暗だ。空を見上げると星が輝いている。この調子なら、今回もあの瞬間が見られるだろう。自分も湯を沸かし出発の準備をはじめた。ずっしりと重いザックを背負い、ヘッドランプを装着する。そして夜明け前の道をヘッドランプの明かりを頼りに、ゆっくりと歩きはじめた。

涸沢小屋を通過して、樹林帯の中でどんどん高度を上げていくと、雪渓に出る。この辺りまで来る頃には、空がうっすらと明るくなっている。雪渓を渡り切り、ザイテングラードの取り付きに向かう斜面を、静かに息を切らせ登ってゆく。そろそろ時間だ。

東の山に目をやると、山の端からオレンジ色の光線が飛んできた。自分を、そして山々を一気に染め上げていく。太陽が姿を現したのだ。じつに神々しい。一億五千万キロもの向こうからほとばしるエネルギーをぶつけてくる。あらゆるものに生命を吹き込むように。

この光景を見れば、誰しも太陽に「神」を感じるだろう。だからかもしれない、太陽は古来より神と崇められ、世界各地の神話に登場してきた。太陽は光をもたらし、食糧を育んでくれる。しかし地を焼き、水を奪うこともある。その意味でも太陽は、我々の生死をつかさどる神であった。

しかし、この神は冷徹なまでに公平だ。山の中で自分がこの神を慕おうと、地球上の誰かがこの神を憎もうと関係ない。太陽はただ決まった時間に姿を現わし、我々を照らし、また沈むだけだ。つまり、誰がどんな生き方をしていようと、分け隔てなく、時に厳しく奪い、時にあたたかくもたらしてくれる。——だから全面的に受け入れ、信じることができるのだ。

今日もまた太陽が昇っていく。そして数時間後には自分を頭上から激しく焼き、体力を奪うだろう。だが夕刻にはきっとまた美しい姿を見せてくれるだろう。

（文／写真　もり・たけと）

授与品のご紹介

飾り紐付き 破魔矢

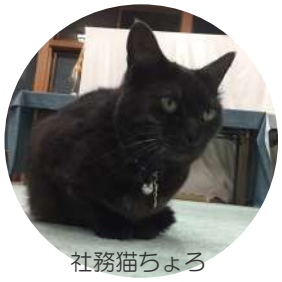
紅白二本の江戸打ち紐と水引で破魔矢を飾りました。飾り結びは縁起の良い几帳結び・菊結び・叶結びです。ひとつひとつ丁寧に結いました。弥生神社オリジナルの破魔矢です。

干支の繭玉人形付き ミニ熊手

新年の福を集める小さな熊手。お正月までの長い間、コツコツと奉製しました。竹の熊手を松・梅・淡路結びの水引飾りと鮮やかな千代紙、麦と稲の穂、干支の繭玉人形で飾り、柄を大麻で結いました。繭玉の戌ばひとつずつ表情が違います。弥生神社オリジナルの熊手です。

今年は押し入れを出て広い世界へと飛び出そう！…かな

社務猫きーこ



私は今年もちょろちょろ駆け回ります。社務を終えたらスープ一筋。

社務猫ちょろ

編集後記

ご協力頂いた皆様のおかげで「弥生」十三号を発行することができました。心より感謝いたします。ちょうど五年前の第一号からスタートして五回めの初春号。様々な方に関わって頂きながら多彩で充実した社報へと一歩ずつ歩むことができました。

弥生神社に参拝し、行事に参加して体験的に神社、神道に親しんで頂くとともに、文章、言葉を介した交流を、知識や情報をお伝えできる社報の発行という形で大切にして参りました。紙面を通して神社、神道に触れ、日本文化や人間の営みに思いを馳せるきっかけになればと願いつつ今後も製作に励んで参ります。

今号では、初春号としてのテーマを光あるものにしたいと、太陽、陽光の「陽」にいたしました。日々昇っては沈む、太陽系の中心に空の向こうに在り続ける絶対的存在としての太陽。一年の季節を感じて一日の時を知る、私たちの生活や生存のベースに密接な太陽。その光の眩しさや熱さを思い出しながら、それぞれの文章を味わっていただければと思います。地球という天体にいる私たちの存在をも日常とは別の視点から感じさせられます。

毎号ご報告しております季節ごとの行事、ワークショップに加えて『大祓詞』の書写会も始めてから三年めになりました。おかげさまで毎月こつこつと続けております。どの行事も、ご参加の皆様が心穏やかなゆったりとした時間を過ごせることを、何よりの目的としております。その中で、昔からの風習を学んだり、手作業の楽しさや自然に触れる喜びなどを感じたりして頂ければ幸いです。お気軽にご参加ください。

本年もよろしくお願いいたします。

写真　荒谷美子　金野詩暢
印刷　文明堂印刷
編集 発行　弥生神社
神奈川県海老名市国分北
二―十三―十三

Facebook　Twitter